

【序論】

研究動機・研究目的・研究方法

小学校体育におけるボール運動系の領域において、ハンドボールは手で容易に操作できることやボールを保持していない時の動きなどの技能を身につけるのに最も適しているボール運動であると考えられる。また、小学校学習指導要領では、ハンドボールは「ゴール型」に分類され、教材として高く評価されている。筆者は、「ボール遊びの集い」を通じて小学校の子どもたちと触れ合う中で、発達段階における子どもの運動発達に興味をもった。そこで、子どもたちが運動を習得するうえで最適な学習期はどの時期にあり、子どもの運動はどのように発達していくのか、また、ボールゲームで大切な「ボールを持たない動き」に必要な運動能力、そして、それを習得するのに適した教材は何かと考えた。

本研究の目的は、小学生の運動発達に応じた「ボールを持たない動き」の体系とその重要性を明らかにし、子どもたちの運動能力の向上に適した教材を開発することである。方法としては、秋田大学で行っている「ボール遊びの集い」に参加している子どもたちを対象に、筆者が子どもたちの運動発達の実態を把握しながら行った指導事例を運動学的視点から分析し、考察していく。

【本論】

第1章 小学生の運動発達

本章では、主に特徴的な運動発達論を述べている A・ポルトマン、K・マイネルの運動発達論を基に比較考察を行った。両者に共通していることは、人間の運動発達をモロフォロギー的考察から述べている点である。A・ポルトマンは、動物の誕生時から生後1年後までの乳幼児期について深く論じており、人間の誕生時の状態が「生理的早産」であると表現している。人間の発達について他の動物、とくに哺乳類と比較して発達論を展開している。つまり、動物学・形態学・行動研究により解き明かし、「人間は動物であって動物でない質的にちがったものだ」(ポルトマン,1961)と述べている。一方、K・マイネルは、各年齢段階における運動発達を一般的な特性から述べている。幼児期から小学校低学年期においては、把握の発達、直立から歩行への発達や走、跳、投、捕、そして運動の組合せに至るまでの発達を年齢段階に即して詳しく述べている。小学校高学年(9~11,12歳)は、最適学習期であると述べられ、子どもが学習や運動を習得する上で大切な時機であるとまとめられている。

以上の比較から小学生の運動発達の一般的特性について述べている K・マイネルの運動発達論を基に、小学生の運動能力を育む教材づくりを進めていく。

第2章 ハンドボールの特性論

本章では、ボールゲームの特性・概念、ハンドボールのボールゲームとしての特性についてまとめた。ハンドボールはチームスポーツであり選手同士の相互の関わりのもとゲームが遂行される。身体接触が多く、ゲームの行為は相手の妨害のなかで実行される。相手の妨害や状況に応じてプレイヤーは技術・戦術の選択を求められるため多面的な運動能力がもとめられる。さらに、ボールを持たない動きを向上させるための創発能力に着目すると、特に「体感能力」「カン創発能力」の側面が重要であると考えられる。

第3章 ハンドボールの教材づくりと事例研究の意義

本章では、事例研究の意義、教材づくりの意義を述べている。

事例研究は、観察者と被調査者が間主観的に関与しながら相手の体験しつつあるものを把握する。研究者は子どもの動き方を、子どもにも引き込まれていったり成り込んだりしながら把握し、さらに、一緒に動くことによって対象者の感覚世界に入り込み、それを感じ取ることができる。教材づくりとは、①「教育内容」から「教材」へ：知識の分析や様々な事実、現象から子どもの興味・関心をひきつけるような素材を選択し、構成していく方法と、②「教材」から「教育内容」へ：素材のおもしろさが発見され事後的にその事実を分析し、教えるべき教育内容が見出され、その素材がどんな教育内容と対応しうるかという価値が見出される方法があり、この両方の方法が相互に関係している(藤岡,1991)。本研究では、ハンドボールを通じて運動発達に見合った教材、子どもに身につけさせたい「ボールを持たない動き」を育むためにどのような教材が適しているかを考え、基礎ゲーム、予備ゲーム、目標ゲーム(佐藤、木谷,2000)と系統性をもたせた教材づくりを工夫し活動に取り入れた。

第4章 ハンドボール実践の事例研究

本章では、平成20年4月から12月まで、秋田大学で行ったボール遊びの集いの指導実践を基に、実際の運動場面での子どもたちの動き方を読み取り、考察を行い、そこで見られたボールを持たない動きを類型化した。運動発達に応じ、教材を工夫しながら実践していく中で、子どもたちの動き方の変化、それに伴う運動能力の発生をとらえることができた。(発表当日はいくつかの事例を紹介する)

【結論】

本研究では、今年度の「ボール遊びの集い」の活動の中からいくつかの事例を抽出し考察を行った。その結果、特にボールを持たない動きに関わった「体感能力」「カン創発能力」をとらえることができた。さらに、各学年において体格や運動能力の差があることから子どもたちの年齢段階における運動発達に即した教材が求められることが明らかになった。指導者は子どもの実態を把握し、運動能力の向上に適した教材を開発していく必要がある。